

## 社会的弱者の家庭環境を建築的アプローチにより よりよくするための研究と設計

日大生産工(院) ○助川 怜子 日大生産工 篠崎 健一

### 1. 研究の背景と目的

その国や地域の水準の中で比較して、大多数よりも貧しい状態のことを指す、「相対的貧困率」\*1の割合は日本で15.4%<sup>1)</sup>であり、その中でも「子どもの貧困率」\*2 (17歳以下)は11.5%<sup>1)</sup>となっている。日本の子どもの約7人に1人は生活が苦しく、経済的に豊かな家庭との格差が大きいことがわかる。さらに、アマルティア・セン\*3は「貧困は潜在能力の権利の剥奪」と唱えている。貧しい環境化で生活をしている人は、様々なことを諦め、多くの我慢を強いられている。そして、そこでは目に見えない貧困が連鎖している。

時には社会から排除され、頼る場所がなくなってしまう。さらには、社会に参加する機会が減り、どこかへ出かけたり、人と会ったり、ともに活動するにもお金がかかることが多く、そのため自分が参加しているコミュニティからも遠ざかり、人とのつながりも少なくなってしまう。貧困は低所得であることだけでなく、就労の不安定さや学力不足などさまざまな面で、格差があることは歴然としている。

経済的な問題で十分な教育環境を得られないのと同じように、空間的環境がその人に及ぼす影響があるのではないかと、空間が人に対して豊かさを与えることができるのではないかと考える。

貯金や、物持ちのいいものを買うなどのお金のリテラシーの欠如、季節行事や誕生日に何をしたいかわからない。そういった価値観や文化は、将来の所得などに直結するものではないが、人生の総合的な安定や生きる力、豊かさにつながる<sup>2)</sup>と考え、本設計は、普段から慣れ親しんでいる、この大学の近くの地域を対象に、相互的な関係を築き、人々を育てていくような、何かに守られたような空間設計を目指す。

### 2. 研究方法

実際に貧困環境にある人や母子家庭にヒアリング調査することは難しい。そのため、厚生労働省や地域の統計データ、葛西リサ\*4や阿部彩\*5を中心とした子どもの貧困や母子家庭の生活に関する既往研究、実際に現在ライターとして活躍するヒオカ\*6の『死にそうだけど生きてます』<sup>3)</sup>から、日本の貧困の現状を理解する。また、空間構成に関しては、山本理顕\*7の『地域社会圏主義』<sup>4)</sup>から人々のつながりが生まれる空間の着想を得る。さらに、大久保商店街周辺を中心とした地域の歴史や成り立ち、実際に今建っている建築物の状況を現地で調査する。

### 3. 分析と考察

#### 3.1. 低所得家庭環境で受ける影響

生まれながらにして貧しかったり、幼少期の体験剥奪\*8が見られたりする<sup>5)</sup>。また、学習環境

\*1) 相対的貧困率とは、所得中央値の一定割合(50%が一般的。いわゆる「貧困線」)を下回る所得しか得ていない者の割合をいう。これらの算出方法は、OECD(経済協力開発機構)の作成基準に基づく。

\*2) 大人も含めた国全体の「相対的貧困率」とともに、日本では厚生労働省が3年に1度公表するもの。子ども全体に占める、等価可処分所得が貧困線に満たない子どもの割合をいう。

\*3) インドの経済学者、哲学者で、アジア初のノーベル経済学賞受賞者である。研究内容は、飢饉、人間開発理論、厚生経済学、貧困のメカニズム、男女の不平等、および政治的自由主義などがある。

\*4) 追手門学院大学准教授。社会問題、ひとり親、住宅問題、居住貧困、子どもの貧困、シェア居住、空き家、住宅政策、DV被害者、性的マイノリティの住生活問題に関する研究を専門とする。特に、ひとり親の居住貧困問題に関する研究を多く行っている。その解決策として、公的施策への提言のほか、民間の不動産関連事業者とともに、空き家を活用したシェアハウスの提案なども実践している。

\*5) 日本の経済学者、社会政策学者。マサチューセッツ工科大学卒。タフツ大学フレッチャー外交法律大学院修士・博士号取得。国際連合、海外経済協力基金を経て、1999年より国立社会保障・人口問題研究所に勤務。2010年より社会保障応用分析部長を務める。2015年4月より東京都立大学教授に。

\*6) 日本の女性。ノンフィクションライターである。2020年より、貧困問題や格差に関しての執筆活動を行なっている。イベントに登壇、講演活動なども行っている。

\*7) 建築家。1945年北京生まれ。横浜国立大学大学院教授を務め、その後は日本大学大学院特任教授に。2022年より東京芸術大学客員教授に就任。多くの建築作品を生み出している

\*8) 海水浴に行く、博物館・美術館などに行く、キャンプやバーベキューに行く、スポーツ観戦や劇場に行く、遊園地やテーマパークに行く、毎月お小遣いをもらう、毎年新しい洋服・靴を買う、誕生日やクリスマスのプレゼントをもらう、お年玉をもらう、七五三に行くなど。

Research and design to improve the home environment of socially vulnerable people through architectural approaches Research and design to improve

Reiko SUKEGAWA and Kenichi SHINOZAKI

や習いごとなどでの周囲との格差が見られ、その他のことでも格差がある (Table1)。

**Table 1 文献から抽出した具体的な体験談<sup>6)</sup>**

分類	内容 (一部抜粋)
幼少期	<ul style="list-style-type: none"> <li>・七五三をやっていない</li> <li>・習い事をさせてもらえない (通信教育を含む)</li> <li>・お年玉という文化がない</li> <li>・親戚との交流がない (交通費が無くて家に行かない)</li> <li>・ゲームや漫画をはじめとした娯楽はない</li> <li>・友達の家まで行ってゲームを一緒にした</li> <li>・家にジュースはなく、飲み物は麦茶のみ</li> </ul>
中高生	<ul style="list-style-type: none"> <li>・制服がおさがりで寸足らず</li> <li>・ユニフォームや道具、合宿にお金がかかるため部活をさせてもらえない</li> <li>・音楽プレーヤーが買えない</li> <li>・参考書はほぼ中古</li> <li>・塾に行けない</li> <li>・浪人、私立進学という選択肢がない</li> <li>・家に学習環境がなく、学校が終わると図書館へ移動し、毎日閉館まで残って勉強をしていた</li> </ul>
大学生	<ul style="list-style-type: none"> <li>・PC が買えない</li> <li>・PC がないため課題をするために、休日 40 分かけて大学に行く</li> <li>・大学の入学金は、知り合いに借金</li> <li>・仕送りをもらったことがない</li> <li>・美容院はカットモデルで 0 円</li> <li>・服が買えなくてトータルコーディネイトができない</li> <li>・下着は高校生から使っているもの</li> <li>・成人式に振袖が着れず (レンタルできない)、しまむらのスーツで参戦</li> <li>・ゼミの飲み会に参加できない</li> <li>・友達とプレゼントの予算が違いすぎてお返しに困る</li> <li>・奨学金が実家の生活費に使われる</li> <li>・交通費が足りず、祖母の葬式に行けなかった</li> <li>・大学の卒業式で袴を着れない</li> </ul>
現在	<ul style="list-style-type: none"> <li>・一人暮らしはできない</li> <li>・車の免許が取れない</li> <li>・体を壊して入院すると、生活が脅かされる</li> <li>・奨学金返済の負担</li> <li>・住環境が整えられず不眠症になる。心療内科で精神安定剤を処方される</li> </ul>

自分を取り巻く環境が困難であればあるほど、周囲から理解を得ることが難しくなり、人が外へ出ることや人とつながることから遠ざけている。その結果、貧困はどんどん見えなくなっていく。

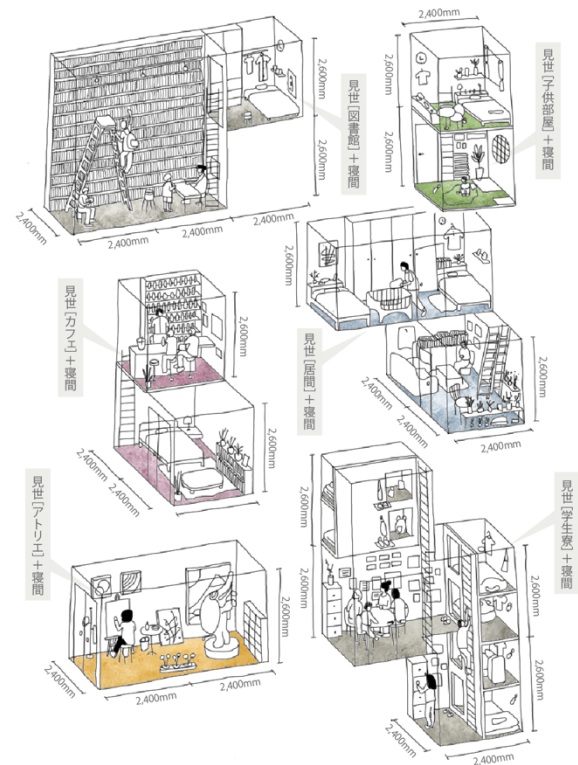
### 3.1. 母子家庭の現状

子どもがいるひとり親の貧困率は44.5%と半数に近い割合である。母子世帯の住宅所有関係は、母子世帯の発生要因やそれを取り巻く社会状況の変化に強く影響を受けている<sup>7)</sup>。母子というだけで冷遇され、住環境も劣悪なケースもある<sup>8)</sup>。年収の面では、令和2年の平均年収は272万円となっていて一般家庭と比較すると、約1/3 と大きく低い<sup>9)</sup>。悩みについては、教育・進学について考えることが多く、次いで、しつけについても悩みがある。

### 3.2. 地域社会圏主義

住宅はプライバシーやセキュリティこそが重要だと考えられている。これは、「一住戸＝

一家族」という住み方によってプライバシーやセキュリティという概念を気づかないうちに徹底教育されたからである。しかし「地域社会圏」とは、全てが「一住戸＝一家族」モデルの逆であり、実際にそこに住む人たちの生活を最優先する。そのためには実際の建築空間がどのようになるのか、なによりもそれが極めて重要である。住宅は賃貸で、できるだけ専有部分を少なくして共有部分を多くする。構成する住宅、ここではその住宅を「イエ」と呼び、「イエ」は「見世」と「寝間」によってできている (Fig. 1)。



**Fig.1 地域社会圏の「イエ」の例④**

「見世」は、個人の趣味や特技、他人のために活かせる環境が揃う。例えば、子供を一時的に預かったり、日曜大工や外国語を教えたりと個人がサービスの受け手だけでなく、担い手にもなれ、「自己表現」が実現される。

「地域社会圏」では相互扶助が促され、高齢者介護や子育て支援をはじめとしたさまざまな公共サービスが提供される。新しい建築をゼロからつくらなくてはその思想が実現しない、というわけではなく、既存の住宅街、住宅団地をほんの少し改築、改造するだけで、その単なる住宅地を「地域社会圏」のように交換することができる。「地域社会圏」を考えるということは、どのような場所で、どのように生活したいのかを、具体的に考えることである。

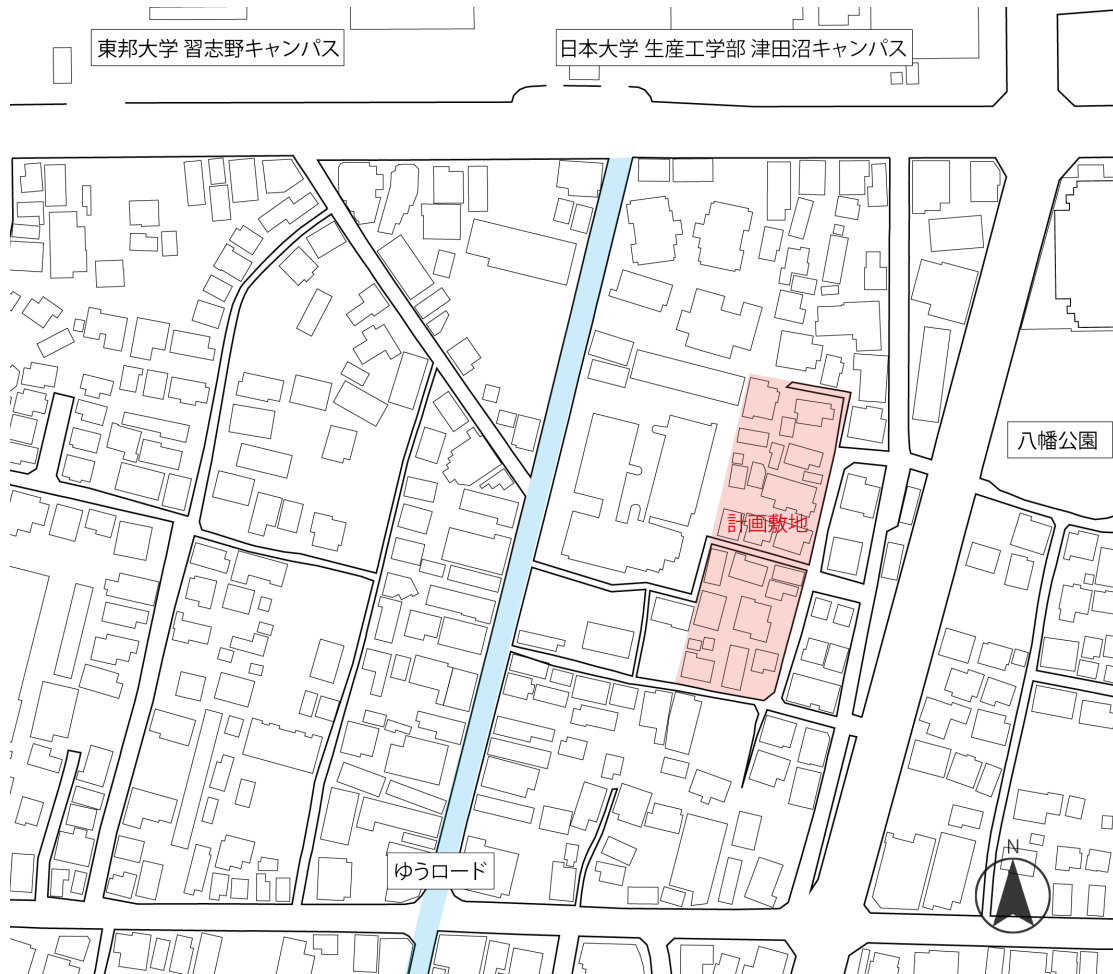


Fig.2 計画敷地および周辺の詳細

#### 4. 敷地について

##### 4.1. 大久保商店街

江戸時代では徳川幕府の放牧地で、明治時代になるとその場所に軍事基地が置かれ、同時に軍関係者や兵隊を相手とする商店街が増加し商店街が形成された。

現在の久保商店街は、「ゆうロード」と名付けられ、約700mある商店街である。朝や夕方は学生の登下校の道として、日中は地域住民が利用しているイメージを持つ。建物の老朽化やシャッターが降りている店舗、人口の増加により高層の住宅が並び、新旧高低の様々な建物が立ち並ぶ。

##### 4.2. 計画敷地の特徴と決定

大久保商店街から、細い路地に入った閑静な密集住宅地を選定する (Fig. 2)。緩やかな傾斜を持ち、異なる構造、築年数、高低差や大きさが異なる住宅が混在しており、細い道に囲まれ複雑な路地空間を持つ。近隣には高層のマンションが複数建ち、視界を遮断する (Fig. 3)。それは、視線の抜けがなくなるだけでなく通風

や日光も遮断してしまう。それぞれの住宅はブロック塀で囲われ、窓が締め切られ、閉鎖的で建物自体が独立した空間になっている (Fig. 4)。また複数空き家もみられ、立入ができないようにロープが張ってあったり、建物が植物に侵食されていたりと、長い年月が経ち、人が住んでいないことがはっきりとわかる (Fig. 5)。



Fig.3 視界を遮る空間



Fig.4 閉鎖的な空間



Fig.5 空き家

## 5. 計画・空間構成

### 5.1. 空間のあり方

行為によって生み出される空間を考え、それらを組み合わせたりすることにより、新たな空間を計画する。そして、ここに住む人や利用者が学生や地域住民がつながりを持ち、密接に関わり合う空間を目指す。

### 5.2. 脱専用住宅化

「一住戸＝一家族」の概念を壊し、居住空間は最小限の機能だけにして、キッチンやお風呂、トイレなど共有する面積を広くする。また、個人的に共有するスペース（「見世」）を住戸に挿入する。住人はある時は供給側に、ある時は受けて側になる。住人が外に開く「見世」を持っているからこそ、地域コミュニティが形成されていく（Fig.6）。

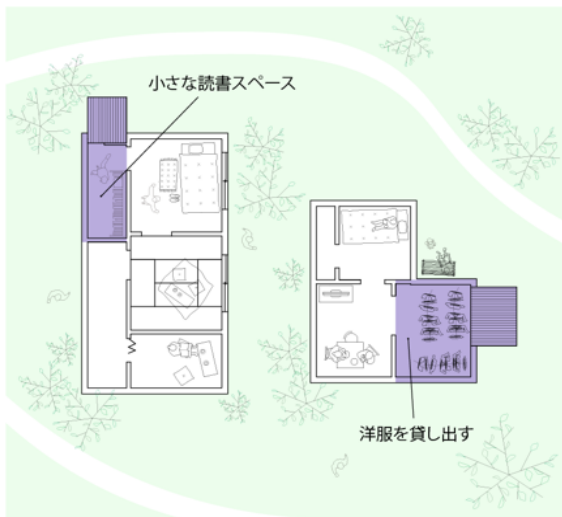


Fig.6 居住空間の例

### 5.3. ストラクチャーの再編

既存の建築物の構造を残し、再度空間編成を行う。異なる建物の構造体を組み合わせることで、新しい空間と道ができる。

### 5.4. 空き家の利用・解体

空き家を囲む塀を取り除き、住人や歩行者のための路地や広場として整備する。また、玄関部分を「見世」にしたり、縁側を設置したりすることで、閉鎖的な空間に人が集まる機能を持たせ、人と人がつながる場をつくる（Fig.7）。

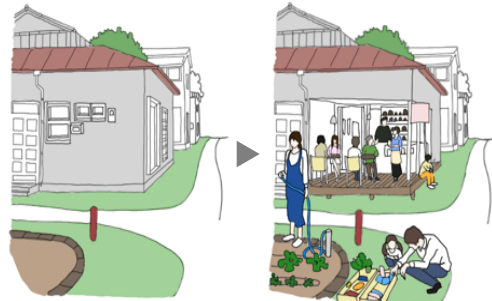


Fig.7 空き家を利用したイメージ<sup>4)</sup>

## 6. 今後の展望

人は、完全に他者と同じ立場になることは難しい。加えて、自分に置き換えてみることの限界がある。しかし、他者の視点になってその立場を想像し、考える行為が尊いのではないのか。この計画が、日頃、目を向けない人や事柄に再度関心を持つ人が増えるきっかけになるよう考えながら、引き続き、行為を中心とした空間設計を進めていきたい。

### 参考文献

- 1) 厚生労働省, 2022 (令和4) 年国民生活基準調査の概況, 2023, p. 14
- 2) 毎日新聞, 子どもの貧困 この10年, 2023
- 3) ヒオカ, 死にそうだけど生きてます, 株式会社CCCメディアハウス, 2022
- 4) 山本理顕, 上野千鶴子, 金子勝, 平山洋介, 仲俊治+末光弘和+Y-GSA, 松行輝昌, 地域社会圏主義 増補改訂版, LIXIL出版, 2013
- 5) 小田川華子, 家賃負担が子供の生活に与える影響—広さ・家賃負担・その他の支出のせめぎあいの実証分析—, 社会施策学会誌『社会政策』第11巻第3号, 2019
- 6) ヒオカ, 私が“普通と違った50のこと”～貧困とは、選択肢が持てないということ～, 2020, <https://note.com/kusuburuboku/n/n0388706f00a5>, 2023
- 7) 葛西リサ, 塩崎賢明, 堀田裕三子, 母子世帯の居住実態に関する基礎的研究, 日本建築学会計画系論文集 第599号, 2006, pp. 127-134.
- 8) 葛西リサ, 格差5 母子家庭の居住貧困, 建築雑誌 JABS, vol. 133, No. 1714
- 9) 厚生労働省, 令和3年度 全国ひとり親世帯等調査結果報告, 2022
- 10) 阿部彩, 子ども期の貧困が成人後の生活困難（でプレベーション）に与える影響の分析, 季刊社会保障研究, 国立社会保障・人口問題研究所, 第46巻, 4号, pp. 354-367,
- 11) 阿部彩, 子ども期の貧困が成人後の生活困難（でプレベーション）に与える影響の分析, 季刊社会保障研究, 国立社会保障・人口問題研究所, 第46巻, 4号, pp. 354-367,
- 12) 関根由紀, 日本の貧困—増える働く貧困層—, 労働政策研究・研修機構, 第563巻, 6号, 2007, pp. 20-30.